



北京世界女性会議-女性NGOフォーラム
女性たちの平和パレード

黙っていては進まなかつた
一性差別撤廃

我が国初の女性首相の誕生だが概して女性には不評である。特にフェミニストと呼ばれる人たちには、それを「女の敵は女」と揶揄する向きもある。この現象に、そもそもフェミニズムとは何なのか? ウーマンリブやジェンダーフリーはどう違うの? という疑問が改めてわいたので、今回は長年、女性解放運動に関わってきた船橋邦子さんに寄稿していただいた。今だからこそ知りたい「フェミニズム、イロハのイ」。わかつた氣でいたけど、意外に知らない「女性学」の基本について学んでいきたい。

暴力から対話、競争から共生の社会に向けて フェミニズムが可能にしてきたこと、これから目指す世界

ジェンダー・ギャップ指数(GG)ー世界一位を16年間維持しているアイスランドのドキュメンタリー映画「女性の休日」を見た。この映画は、国連が「国際女性年(※1)」と決めた1975年の10月24日、90%の女性が家庭や仕事を一齊に放棄するストライキを行った記録である。

首都レイキャビックに集まつた数十万の女性の大合唱、眩しいほど輝いた顔、顔スクリーンの光景に私の体内も熱い血が流れ一緒に歌いたくなつた。この歴史的大イベントを企画した女性たちの会話が実に素敵なのだ。トップダウンではなくみんながメインアクターとして発言し行動する。楽しそうな女性の連帯が社会を変えたのである。

アイスランドは、女性大統領のもとに世界最年少の女性首相、3つの党の党首が全員女性。この背景には女性のストライキを契機に、性差別、ジェンダーフレームを「構造的問題」として捉え、法律など制度変革を社会全体で取り組んできた運動があり、政治改革を政治家に任せることではなく、女性が男性を巻き込みながら進めたのが成功要因だつたと指摘されている。

これに對して日本では「構造的差別」に目をつけ、固定位性別役割意識の是正など個人の意識「心がけ論」に終始構造的差別の解消は進んでいない。第6次男女共同参画基本計画もアンコンシヤス・バイアス(無意識の思い込み)など力タカラ語が使用され、問題が矮小化されている傾向が顕著である。

実効性をもたせた行動綱領 (Platform for Action)

- キーワード
エンパワーメント、コミットメント、パートナーシップ
- ジェンダーの主流化
- 無償労働の可視化
- ジェンダー統計
- リプロダクティブ・ヘルス・ライツ
- 女性への暴力

北京行動綱領の骨子

フェミニズムの国際的ネットワークとバックラッシュ

日本女性たちも1970年ウーマンリブから1975年に始まる国連を中心とした女性の人権確立運動、性差別撤廃の運動に呼応して運動を展開してきた。

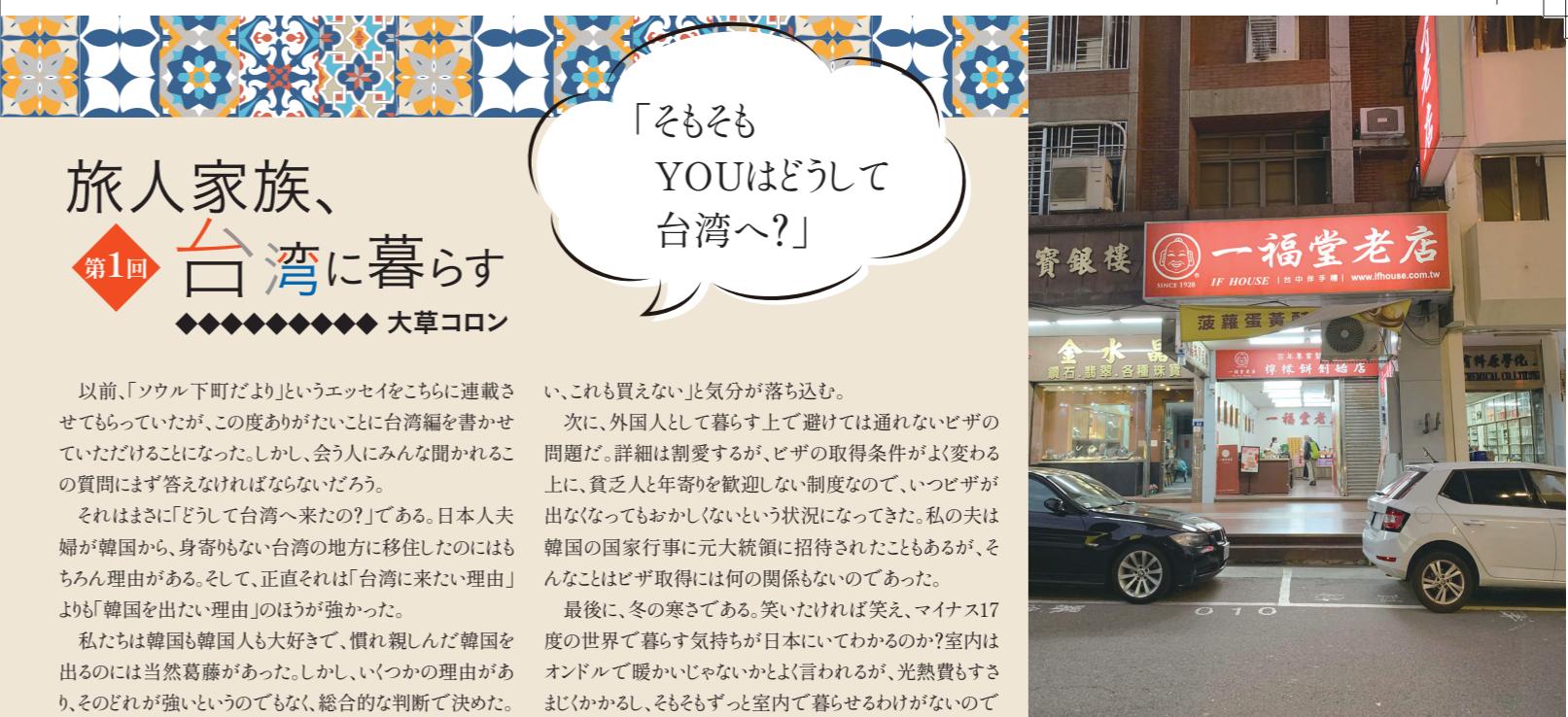
私自身もフェミニズムアクティビストとして他のアジアの女性たちとネットワークをつくり、1992年には日本でアジア女性会議を開催し、「北京行動綱領」の策定に準備過程から関わった。

1995年北京での「世界女性会議」には世界各地から女性たちが集まり、政府間会議とNGOフォーラム合わせて5万人となった。日本からも自治体が派遣のために予算をとり5000名が参加。各地にDV被害女性のための民間シェルターや女性の政治参画を進めるための運動も広がった。

また、ソ連解体後の国際的なブライズムの広がりから、国内でも自社さきがけ政権が誕生し、村山政権では「戦後50年談話」での日本の加害の歴史に対する国家としての謝罪がなされた。

そこが、国際的な性差別撤廃の流れを受けて男の高学歴化など、女性が主体的に乗ることで生まれた「フェミニズムの成果と保守政党の女性登用戦略」に女性が主導的に乗ることで生まれた「フェミニズムの成果と保守政党の女性登用戦略」である。しかし残念ながら、1970年から半世紀の間に進んだグローバルなフェミニズム運動が求めてきた「平等開発平和」が遠のいているのが現実だ。

日本会議を中心とする保守系団体が支援する高市首相の政策は、性差別撤廃に向けた国際動きに反することは明らかで、その証拠に国連の女性差別撤廃委員会から「批准国として実現すべき」と4回も勧告を受け、経団連でさえ請しているにも関わらず選択的夫婦別姓に反



以前、「ソウル下町だより」というエッセイをこちらに連載させてもらっていたが、この度ありがたいことに台湾編を書かせていただけた。しかし、会う人にみんな聞かれるこの質問にまず答えなければならないだろう。

それはまさに「どうして台湾へ来たの?」である。日本人夫婦が韓国から、身寄りもない台湾の地方に移住したのにももちろん理由がある。そして、正直それは「台湾に来たい理由」よりも「韓国を出たい理由」のほうが強かった。

最後に、冬の寒さである。笑いたければ笑え、マイナス17度の世界で暮らす気持ちが日本にいてわかるのか? 室内はオンドルで暖かいじゃないかとよく言われるが、光熱費もさすまじかかるし、そもそも室内で暮らせるわけがないのである。

他にもいくつかの理由があるが、きりがないのでこの辺でやめて、次に台湾を選んだ理由である。暖かい国、日本と韓国から近いことがまず条件だった。さらに、どうせ行くなら中国語が学べるところがいいと思った。私たちは日本語、英語、韓国語を話せるので、さらに中国語を身に付けたらできることが広がる。

そして、私は元々漢字と中国語の書きが好きだったので、次に住むなら中国語圏だと思っていた。さらに、台湾は繁体字を使ないので、簡体字よりも学びやすい。そして美しい、と個人的に思っている。

そんなわけで、台湾がいいんじゃないかと考えた。ちなみに

編集後記



我が国初の女性首相の誕生。しかしそのことを喜べないフェミニストが多いのはなぜ? と思った時、そもそも、フェミニズムの思想というものについてわかつてないかたことに気がついた。

ウーマンリブ、フェミニズム、ジェンダー…いろんな言葉で性差別について語られてきたけれど、バイアスがかなりすぎで、多くの人がきちんと向き合うことができていなかつたと思う。

もちろん、私その一人、フェミニストとは、努力奮闘して男女社会で闘つて女性たちのことで、ヘタレで怠け者の自分はそのなかに入らないと思っていた。

そこで、フェミニズム特集を企画。今回

いる船橋邦子さんの本を読み、「本人からレクチャーを受け、目から鱗が剥げた」。遅ればせながらフェミニズム、すなわち性差別とは人類が共通に取り組むべき問題だとよきやく気がついた。

LGBTQの問題は傍に置いたとしても、要是「人

口の約半分が差別されている構造を放置し、差別が

なくなるわけがない!」といつも、2月号は、さらにそこから深掘りした「戦争とジェンダー、家父長制」について、船橋さんを紹介。たまたま原稿をお預けしていただいた吉沢智子さんの対談を予定しています。

さて、その高市早苗首相による「台湾有事は、我が

国の存立危機」云々の発言が、一気に日中関係を悪化させているなか、明日(12月15日)から台湾と

111kmの与那国島行く。そこで取材活動を続け

る本誌常連ライター西村仁美さんの陣中見舞いを兼

ねた観光旅行だが、現地の様子を見ておきたい。

もっとも、そこで暮らす人々は、自分らに問題ないところで何を勝手に騒ぐ散らかしてゐるはずだ。

どうぞ、どうぞ、自分らに問題ないところで何を勝手に騒ぐ散らかしてゐるんだ!」と思つて

いるはずだ。

Monthly ちゃぶ台 Low Round Table

Vol.41 2026.1

Chief Editor: Reiko Fujimiya
Designer: Saiko Kurokawa

各銘舎

chabudaikumei@gmail.com
090-1739-2364

「Scribble Magazine ちゃぶ台」は、

50号(2026.10月号)でいったん終了します!

Scribble とは「落書き、下書き」のこと。コロナ禍の2022年夏、当時の閉塞感に満ちた形だけの正義と付度に溢れた状況のなかで、「言いたいこと言いくくなる世の中」への恐怖に対して「何ができるか」と思い、「批判覚悟、自己満足上等」で「ちゃぶ台」を始めました。やってみると意外に楽しく、続けていくうちに「脱戦争」と「循環型社会」がテーマとして浮かび上がり、マイストリームのメディアが取り上げないさまざまトピックを発信しています。引き続きよろしくお願いします。

カンパの振込先 東京スター銀行 藤沢支店 普通預金7626172 フジミヤレイコ
連絡先 chabudaikumei@gmail.com 090-1739-2364

#これまでの特集#

#戦争PTSD日本兵/#自然農畜戦記/#国境の与那国島①/#ごみの資源化/#真山勇一氏対談/#草木循環Labo/#泊江の小さな沖縄資料館/#憲法審査会/#脱戦争シンポ/#日本~韓国~北朝鮮の国境旅/#川越手稿舞場/#動物福祉とエコカル消費/#映画上映会/#ミニアシアター/#食の安全/#日中口述歴史・文化研究会/#STONE MUSIC(長谷川時夫氏)/#斎藤幸平氏と自然農/#シティミクタリ/#西アフリカ・ベナン共和国/#バレスチナ戦争/#与論島もずくそば/#靖国神社訪問記/#戦友会(速藤美幸氏)/#里山管理と養鶏/#伊勢崎賢治氏講演/#沖縄旅/#WE21ジャパン/#小川町移住コミュニティ/#旧満州訪問座談会/#兵庫県知事選問題/#国境の与那国島②/#介護保険崩壊/#311復興ウォッキング/#台湾作家 陳澄波/#植草一秀氏インタビュー/#泊江「水辺の楽校」/#ミヤンマー情勢/#フェミニズム



Low Round Table
Vol.41 2026.1

対している。

彼女とその支持者たちの主張とは、「強いこと」は「いいことだ」とする家父長制の温存であり、「強い国づくり」のための政策である。防衛費は過去最大の11兆円を補正予算で計上し、三菱重工をはじめとする軍事産業の強化でGDPを増やし、台湾有事発言で中国との対立は深まるなか、国民の不安は増大するばかりだ。

一方で、私が関わっている地域の民間シェルターには、夫の暴力から逃げてくる女性たちが多い。特に最近は子沢山の幼児同伴の母親が急増しているが、多産は男性が避妊に協力しない結果であり、一種の性暴力である。

暴力の99%は強者から弱者への権力の濫用であり、こうした私的領域の暴力は家父長制の特色である。5人の子どもと母親と祖母が暮らすケースでは、祖母もDVの被害者だった。面前で振るわれる暴力を覚えた子どもたちは、自身もまたそれを行使していく。これもまた現代日本の実相である。

市民革命と近代社会の主役は特権階級の白人男性のみ

本来、普遍的である「人権」、フランス革命の「自由・平等・博愛」はエリートの異性愛主義、トルンスでないシス・障がいのない白人男性のものでしかなかった。

その白人男性たちがつくりあげた帝国主義に、自然を征服し手段を選ばず結果を求める戦い、自然を語る手段を選ばず結果を求める植民地支配は、先住民から土地、言語、文化を奪い、自然を征服し手段を選ばず結果を求めた。こうした近代市民社会から女性が排除され、女性は自然に備わっている」という「母性神話」、「3歳までは母親の手で育児すべき」という「3歳児神話」など近代家父長制が女性を支配する

ために作った、さまざまな言説に科学的根拠がないことをあぶりだした。

そうした言説を作った人が、実はフランスの近代啓蒙思想家ルソーで著書「エミール」で書いた「男女は人間として平等だが生まれつき性があり、それにふさわしい教育が必要である」という「性別特性論」は、現在もしばしばフェミニズム攻撃に登場する。

また、第「波フェミニズム運動の有名なスローガン」「個人的なことは政治的なこと」は「暴力や貧困はあなたのせいではなく家父長制の構造が問題である」として明らかにした。こうした「女性学」から、男性自身が「男らしさ」を規範とした生き方や家父長制を問う「男性学」も誕生した。

「ジェンダー」こそ両性間のアンバランスな力関係の原因

さらに社会の分析概念としての「ジェンダー」の発見も大きい。「ジェンダー」とは「社会的文化的性差別」であり、それが「両性間のアンバランスな力関係をつくる」としている。

「ジェンダー」という用語が国際文書に明記さ



同会場にて、フランスの核実験に対して抗議スタンディング(右)

元「従軍慰安婦」による証言が女性への暴力撤廃を切り拓いた

「フェミニズム」とは、家父長制とジェンダー規範のもとでの抑圧・支配に気づいた女性たちの解放運動であるとともに性差別構造の変革をめざす運動である。

1979年に国連が採択し、85年に日本政府が批准した「女性差別撤廃条約」、さらには国連第4回女性会議(北京会議)で採択された「北京行動綱領」には「ジェンダー主流化(すべての政策に性差別撤廃の視点を入れること)」が環境・人口・開発平和構築の鍵と明記されている。

それらの背景には、国境を超えたフェミニズム運動である。それは近代の国民国家を超えた脱国家の運動であり、女性たちは「地球市民として、国家の安全保障ではなく生存権が保障される人間の安全保障」を求めた。さらにそのためには貧困からの解放、女性の人の確立こそが平和と平和には不可欠であることを訴えた。

「女性の権利は人権である」と国際文書に明記されたのは1993年のウエーリーン「人権会議」の

れるようになったのは1990年代になってからで、1979年に採択された「女性差別撤廃条約」には「ジェンダー」という用語はない。95年「北京行動綱領」には性差別を撤廃するためには「ジェンダーに敏感な視点」や「ジェンダーに対する責任ある応答をする視点」の重要性が明記されている。

このような動きを受けて2006年度からジェンダーギャップ指数(G·G·I)の世界ランクが公表されたが、日本は周知のようになっていた。初の女性首相誕生や女性議員の増加で女性が「男らしさ」を規範とした生き方や家父長制を問う「男性学」も誕生した。また生き方や家父長制を問う「男性学」も誕生した。

このように、女性の権利が確立され、女性が主権者として認められる時代が来ました。

<div